

## ●医療政策への期待—医療と福祉の総合的視点から

桐の木クリニック 半田文穂

半田 文穂 (はんだ ふみお)

【学 歴】 1966年 東京大学農学部卒業。1972年 群馬大学医学部卒業。

【職 歴】 1972年～群馬大学附属病院精神科。1974年～名古屋市立大学附属病院精神科。

1977年～ドイツ・ハノーファー医科大学客員研究員。

1978年～尾西病院精神科医長。1980年～西毛病院副院長。

1994年～桐の木クリニック院長

【役 職】 2004年～群馬県精神神経科診療所協会会長。2011年～群馬県精神保健審議会委員。

2014年～日本精神神経科診療所協会理事。2014年～群馬県精神保健福祉協会理事。

【資 格】 精神保健指定医。日本精神神経学会専門医・指導医。

【著訳書】 主論文「ドイツ社会精神医学の実践」(社会精神医学掲載)。「イタリアにおける精神保健法」(臨床精神医学掲載)。「イタリアの精神医療改革と日本の精神医療」(精神医療掲載)。

主訳書E. ヴルフ著「精神医学の変革」(共訳 紀伊国屋書店)。S. シュミット著「自由こそ治療だ」(社会評論社)

【専門分野】 精神病理学及び社会精神医学

多機能型精神科診療所の存在意義は、その原点が「心病める」ことよりも「心病める存在」そのものに焦点をあてていることにあるのではないかと考えます。全国にある精神科診療所では様々なスタイルで治療が行なわれており、それはそれでそれぞれの存在価値をもっていると思いますが、私たちがこの存在意義の原点に立ち帰るならば、診療所のあり方として自ずと「多機能型」にならざるをえないことに気づくでしょう。即ち、決して「多機能型」を目指すことではありませんが、私たちの思いが「心病めること」ではなく、「心病める存在」に向かうとき、必然的に「多機能型」に行きつくことになる、ということでもあります。

このことは、開業医が昔そうであったような「かかりつけ医」として、現在では特に高齢者の場合に包括支援が全面に出てきたことと同様の方向性があるかと思えます。単に「病」をみるというよりは「病者」をみていくことに、人々の目が向いてきているのではないのでしょうか。このような流れの中で、私たちが「多機能型」を前面にかかげることは時代の流れに沿ったことでもあるわけです。つまり、日本の精神科医療の中心的役割を担う時期に入ってきたと考えます。

そのために、私たちはこれから何をなすべきかが問われていると思います。また、それに答えていかなくてもいけないでしょう。それにはまず初めに、私たちは自らの多機能型診療所の拠って立つ基盤をしっかりとさせていく必要があります。即ち、これから進めていく地域精神保健の中心的役割を担うべく、様々な準備をしていくことになりましょう。その準備のなかでも、私たちがかかえている重要な課題の一つは、その経済的基盤と思われれます。かつて、あるいは今でもそうかもしれませんが、精神科診療所が日精診の設立によって初めてその存在意義を確立していったのと同様、私たちは政府・厚労省に向け精神科医療の方向性を含めたあり方とともにそれを担保する経済的基盤に関し、本研究会を通じ自ら考えを発信していく必要があります。

そこで、シンポジウムのテーマは「医療政策への期待」となっておりますが、その「期待」というよりは私たちがこれまで作り上げてきた原点「心病める存在」への関わりを通して、「医療も福祉も」という視点から、現状の多機能型精神科診療所に存在するいくつかの問題を提起していく中で、今回のテーマに答えて参りたいと思います。